

## 二木宏明先生の言葉

小嶋祥三

わたしが1972年に京都大学霊長類研究所心理研究部門に赴任した時、二木宏明先生は神経生理研究部門の助手で米国 NIH の Evarts の研究室に留学していたと記憶している。そして、同じ1972年に帰国された時は助教授に昇進されていたように思う。しかし、1973年に二木先生は東京都神経科学総合研究所に転出された。したがって、わたしが二木先生と霊長研で一緒だったのは1年ほどの短い期間だった。先生はその後、都神経研から東大に移られ、文学部心理の助教授、教授を歴任された。

短い期間だったが、二木先生は忘れることができない言葉を残してくれた。ある時、部門の研究会で、わたしは外国人研究者の論文を紹介した。多分、論文の内容に感銘を受けたのだろう、それを高く評価した。発表を聞いていた二木先生は、わたしが内心その論文の著者と自分を同一視？するかのような雰囲気にかチンとこられたのか、次のように発言された。その論文はあなたの論文ではない、大体、その論文の著者はあなたのことなど知りもしないのだ、と。二木先生は、外国の研究を尊重するばかりではいけない、はやく世界の研究者と肩を並べる論文を書け、と激励されていたのだと思う。

今でこそ、日本の心理学者が外国の雑誌に論文を発表することは珍しくないが、われわれより上の世代では多くなかった。わたしが日本心理学会で国際賞を創設した時に、国際的に活躍された印東太郎先生、大山正先生に敬意を表し、特別賞をもらっていただいた。霊長研で文系の部門は心理研究部門だけだった。他の理系の部門の教員たちは、外国の雑誌に論文を発表するのは当たり前だった。英文論文が少ない心理研究部門は人事でいつも苦勞した。霊長研は部門間の垣根が低かったので、論文がないことは部門の死活問題だった。心理部門の若手助手3名は外国雑誌に論文を発表する努力をせざるを得なかった。

二木先生は心理部門や日本の心理学が国際的な視点を持っていないことを、われわれ若手に気づかせようとしていたのだろう。その後の心理研究部門は、とくに意識することはなかったかもしれないが、二木先生の言葉が指し示した方向で研究活動を行っていった。その成果は分野増となって現れた。霊長研は改組で、9部門から10分野（4大部門）に移行したが、一つ増えた分野は旧心理系の領域だった。

以下、余談だが、二木先生は歯に衣着せずズバズバと話された。クチが悪いのも相当だった。伏せ字なしには書けないが、ある女子短大の学生たちを「〇〇が紅〇姜をくわえている」と表現した。ハラスメントで訴えられなかったのは、時代によるのだろうか。